



ご褒美は、着衣で

みなるでい改

凜世は最近。いけない子になってしまったのかも、
しれません。

もはや、かもしれない、どこのレベルではないで
しようと、自身の思考につっこみをいれる。

全く、私は何を思っているのでしょうか？ 凜世は、
舌先でそれをペロリと舐め回す。

誰がどう見ても、これは、とてつもなく悪い事。破
廉恥極まる所行に他ならない。

——お仕事からの、帰り道のこと。

凜世が所属するユニット、放課後クライマックスガ
ルズの皆とは別行動の、完全なソロ仕事。こういう案
件は、時折ある。

目的の場所は、某地方都市のラジオ放送局。

車で送り迎えをしてくれるのは、最愛の人。

(プロデューサー、さま)

ほんの十数分前まで、車の後部座席に腰掛けていた
のは、凜世。

おしとやかで、物静か。28プロに所属するアイドル
の中で、着物が最も似合うであろう、和風の美少女。

今着ている着物は、紺色の生地に、華やかな花柄模
様。帯の色は、薄い青緑。凜世にとって、お気に入り
の一着。

(悪い事は、とても楽しい事、でもございます)

帰る途中に車から降りて、どこかの、暗い森の中。

深い緑と黒の闇。そして、辺りを支配するのは、ざ
わめく風音と、静寂。そこに、誰かがいるであろうこ

となど、想像もつかないような状況。

凜世は、着物を着崩すことなくしゃがみ込み、好きな人の敏感な部分を、口にて啜え込んでいた。

「んふ、んふ」

かぶかぶ……。かぶかぶ……。しつとりと湿った唇が、男性にとってデリケートな部分を包み込む。歯を立てないようにと慎重に、口腔内をクツション代わりにして受け止める。

幸せ。極上の時。

大好きな人の、敏感な部分を、口で啜え込んでいる瞬間。

（人様が、どう思われるかは……。ご自由に、といったところですよ。けれど）

もじやもじやの陰毛が茂る根本に、両手を添えて、しつかりと固定。小さな口を目一杯開けて、相手を傷つけないようにと慎重に、奉仕を続ける。

凜世は普段、マイクを握り、一生懸命に歌っている。それとはちょっと、異なる行為だった。

（私はこの様に、お外で。殿方の性器を……。お口でおしゃぶりしてしまうような、ふしだらな女でございませう。どうか、お許しください）

応援してくれるファンの方々や、ユニットの同僚達に見られたら、さぞかし幻滅されることだろう。裏切り行為にも等しい、禁断の光景。

それでも……。凜世はしたいと、思ってしまったのだ。この流れは止められない。

（男の方の、性器……。は。誠に、不思議なものです）

かぶ、かぶ、かぼ、かぼ、じゅ、じゅ……。男性器と口膣が擦れ合い、唾液を潤滑油代わりにして、交わる音。口がまるで、女性器かのように。凜世は一定のリズムで、顔を前後にうごめさせていた。

皮が剥かれた先端は、丸みを帯びていて、真ん中に尿道口の割れ目があった。舌先でなぞってみると、プロデューサーは力を抜くかのように、息を吐いていた。亀頭の部分は引つかかるようになっていて、面白い。

ずっしりと重く、バナナのように反りかえり、ギンにそそり立った男性器。それは、プロデューサーが目の前にいる少女……。凜世を見て、発情したという他ならぬ証。態度がどうあれ、体は正直で。凜世と……。自分が担当しているアイドルの女の子と、やりたくなつた、ということ。

（普段。おしっこを出すためについている器官、なのです。……私のお口や、お手々や、あそこで、しきりにしごいて差し上げると、気持ち良くなれるなんて、

誠に不思議で、ございます）

発情しているのは、自分も同じこと。

きつと瞳に、ハートマークが浮かんでいることだろう。

（お二つの玉々が、とてもキュートでございませう）

凜世は細い指先で、しわしわの玉を撫で回した。少女のか弱い手だけれど、力を込めれば潰れてしまいそうなのが、儂くて、可愛らしい。

「うっ。ぶっ。ぐ」

かっぷかっぷかっぷ、じゅずじゅずじゅる。愛撫の速度が速まっていく。唾液に啞えて、苦みを帯びた先走り液が分泌されていく。凜世は、喉の奥でむせ返らないようにと、気をはらう。もう、絞り出す段階に来ているのだとわかる。

（プロデューサーさま。どうぞ。遠慮なく、お達しく
ださい）

そろそろだ。凛世は、頃合いを見計らっていた。

（私のお口を女性器に見立てて、遠慮無く、特濃のミ
ルクを注ぎ込みください）

そしてすぐに、射精は始まった。

プロデューサーは、もう限界。堪えきれないように、
我慢を重ねた表情をしていた。凛世の口内は気持ち良
くて、愛撫も猥身的で一切嫌がることなく、とろ
けてしまいそう。

どぶり、どぶり、どくどく……。

射精の瞬間は、男性にとって、最も快楽を覚える時。

恍惚とした表情になっていくプロデューサーを見て、
凛世は嬉しくなった。うっとりとしながら、白濁液を、
口内全体で受け止めた。

（白い反物のように……。この私を……。あなた様好み
の色に、染め上げてください）

こくり、こくり。少しずつ、凛世の喉が鳴る。

「ん……ぶ」

本来ならば、子を成すため、膣内奥深くに注入され
るべきそれを、口で飲み干していく。

（すごい。まだ、出ております）

飲み干すのより、注入される方が遙かに早い。処理
が追いつかない。

「ぶ、ぶ……。びちゃ……。

口からこぼれ出たそれを、凜世は両手を受け皿にして、すくい取った。

一滴たりとも、無駄にはしていない。

凜世は軽く目を閉じてから、開ける。決意と共に、ごく、ごくんと、口内にたまっているねばねばした白濁液を、一気に飲み干した。

熱い。

苦い。

喉が烧けるかのよう。

男の精を喉を鳴らしながら飲み干す様は、まるで淫魔。黒い翼と、悪魔の尻尾でも生えていそう。さきゆばす、とでも言うのでしょうか？ と、凜世は思った。

「プロデューサーさまあ」

凜世は両手で受け止めた分も、ペロペロと舌でなめ直し、ずるずるずるっと、下品な音を立ててすすする。

「特濃ザーメン。おいしゅうございます」

着物は一切乱れていない。衣服を着たままの、お楽しみなのだから。決して脱いではいけない。プロデューサーとは、そういう約束を交わしていたのだ。

可能な限り着衣のまま、する。それが最近のお楽しみ。二人の密かな、愛の営み。服を着たまま交わる事で、いけない事をしている感じが強まると、互いにそう思った。

今日はお着物。前回は制服。その前は確か……。

(レッスン用のジャージ、でございましたね)

大量の精液を全て飲み干しても、凜世は未だ、口内からそれを引き抜かなかつた。

このままずっと、しゃぶっていたい。ひたすら、愛おしい。殿方の男性器にくびったけになるとは、やはり自分は、悪い子なのだと凜世は実感した。

でも……。続きもまた、楽しいのだ。

少し名残惜しそうに、太く長いものを、口内から引き抜く。どろりと、ねっとりとした液体が糸を引いていった。

凜世は人差し指で、男性器の裏筋をつつ、と撫でてみせる。射精したばかりだというのに、むしろ勢いが増したかのように、ピクンと震えた。

「素敵、でございます。……プロデューサーさま。お次は、どうなさいますか？」

プロデューサーは、凜世の右手を掴んで、太い木にしがみつかせた。

(ふえらちおの後は、本番で、ございますね。よろしゅうございます)

凜世は、着物から下着のラインが浮き出ないよう、常日頃から気をつけていた。

白い、和装用の薄いシヨーツ。凜世は自ら進んでそれを、するすると、膝下辺りまでずり降り降ろしていた。

遮る物一つない、一筋の割れ目が、露わになる。

「高さはいかがですか？」

小柄な凜世と、長身のプロデューサー。体格差を考慮し、プロデューサーが入れやすいようにと、凜世はお尻を突き出す角度を調整する。

もはや愛撫などするまでもなく、柔らかくほぐれている。これを見越して、準備をしてきたのだ。抜かりはない。

順序が違うかもしれないけれど、それは他ならぬ、凜世が望んだこと。

「凜世はもう、準備おつけーでございます。……はい。もう少し、上でございます。んん？ あ。……そこは、違う穴でございますね」

変なところに当たって、こそばゆい。

ぐりぐりと、先端が宛がわれる度に、凜世が現在位置を教えてくれる。

「ふふ。勿論そちらに入れてしまっても、構いませんよ？ え？ ……そこはそのうちに、でございますか？ ふふ。心の片隅に、止めておきますね」

プロデューサーは改めて、ぴたりと、良いポイントを探り当てたようだ。

「そこ、です。はい。間違いありません。そのまま、一気に押し込んで、ください。ん……あつ！」

大きな抵抗もなく、中へと入り込んでいく。ずにゆ、ずずと、沈み込むように。

凜世の、ただでさえ細い体が、裂けてしまいそう。

今、どこら辺にまで入ってきているのだろう。凜世は気になって、下腹部に右手を当ててみた。へそに近い辺りに、固いしこりのような感触がある。自分の体ではない、異物。紛れもなく、男性器の先端部分だ。

（亀頭……でございませぬ）

愛しい人のそれが、自分の中に入っている。男性器の凸と女性器の凹が重なり合い、一つに繋がっている。

セックスをしている瞬間は、最高。ずっとこのまま、時が止まっていて欲しいとすら、凜世は思う。

やがて、進入が止まる。入りきって、行き止まり。

「奥に、当たってます。んっ！ あああつ！ もう少し、でございます！ んうっ！」

ひだひだで包まれた膣道の先にあるのは、子宮。その入口に当たり、更に突き破るように侵入していった。

「んひっ！」

突如、プロデューサーが動き始める。

もう、我慢も限界といつたところだろうか。華奢なこの子をめちやくちやにしてやりたいと、嗜虐心に目覚めたのだろう。凜世にとっては、この上なく望ましいことだった。

「んあつ！ いい、ですよ！ 奥までできてます。そのまま、前後に動いてください。あつあつあつ！ 逞しいです！ すごい、です！」

凜世は言ったものだ。

プロデューサーさま。その……。お仕事の帰りに。

「ごによごによと、小声で、聞き取りにくいけれど、要約すると、ご褒美が欲しいのだということ。凜世にとっては、ささやかなお願い。勇気を振り絞った、大胆な提案。」

プロデューサーが折れて、わかったよと言うと、凜世はばあつと明るい笑顔を見せる。

狙い目は、時折訪れるソロのお仕事。

その時の凜世のパフォーマンスは、控えめに言っても最高だった。

ラジオ番組に出演した時は、くすくすと楽しく笑えるような、軽妙なトーク。

ミニライブに参加した際は、笑顔とダンス、そして軽やかな歌唱力で、子供から大人まで魅了した。

お仕事を一生懸命に頑張って、皆さんに楽しんでいただいて……。でも、自分自身も楽しまなければ、いけません。

だから……。お仕事の後。ほんの僅かな時間で構いませんので。プロデューサーさま。この凜世を、たっぷり可愛がってください。

その望みが叶えられる日の凜世は、一段と輝いて見えた。

「あふつ！ くふつ！ ああうつ！ 激し……！ くうんっ！」

おしとやかな、和風美少女。現役のアイドルである凜世は、プロデューサーの男性と、激しく交わっていた。

必死に、木にしがみつきながらお尻を差し出して、小さな割れ目を目掛けて、下腹部をぶつけられた。

二人の交わりに合わせて、木が不自然に揺れている。けれど、あたかも風のざわめきが配慮してくれるかのように、カモフラージュされていく。

「あつあつあつあつあつはっ！ すごい……。すごいです。私の中、いっぱいになって。んっ！」

ぱんぱん、ぱんぱんと、性行をしている典型的な音。

「あつ！」

殆ど膨らんでいない、胸の辺りをまさぐられる。衣

服の上からでも、下からでも、変わらない。触れてみると、ほんの僅かな脂肪の柔らかさだけ、感じる所。

着けている意味すら無いような、極小サイズのブラジャーが、プロデューサーの手で、丁寧にずらされていく。

「くひっっ！」

豆粒のように硬くなった、二つの乳首。

摘まれて、こねられて、引つ張られる。凜世は口を大きく開いて、喘いだ。

膣内の締め付けが、キュツと強くなっていく。

「あ、あああつっ！ あつっ！ あそこも……おっぱいも……気持ち、いいい！」

凜世は同時に、申し訳なくなっていく。

「小さくて、ごめんなさい！」

思い浮かぶのは、数人。同じ事務所の、アイドルの皆さん。

ユニットや、年齢、立場や性格などはまるで違えど、誰もが皆仲良しだった。

当然、胸の大きな方もいる。スタイルが良くて、モデルさんのような方も。思い浮かぶ、幾人もの顔。

翻ってみて、自分はどうか？ 凛世は俯いた。

「こんなつまらない胸で、ごめんなさい！ んあっ!？」

そんなことないよと、プロデューサーは言った。

平坦。まな板。ぺたんこ。貧乳。谷間の存在しない、農耕に適した平地。

水着のグラビア写真が掲載された雑誌。そんなものが発売された日には、フアンの間で、膨らみがあるだのないだの、果たしてこの写真の凛世は、胸を盛っているのか否かといった、激しい議論が巻き起こるところ。

凛世の口からそんな、自虐的な評価が出る度に、プロデューサーは優しく諭すように、言ってくれた。

「んひいつ！ あっ！ はうっ！」

小さな胸。すごく可愛いよと。

もぎゅもぎゅと強めに、寄せ上げブラのように揉み回される。痛くはない。絶妙な愛撫。

「あああっ！ はあんっ！ んんっ！ んあっ！ はっ！
そこは！ あああっ！ あんっ！」

こうやって触ればちゃんと、感じてくれるじゃない。
可愛い声、出してくれるじゃない。

好きな子の胸は、大きくても小さくても、好きだよ。
だから凜世も、自分の胸を好きになつて欲しいな。そ
んなことを耳でささやかれた。

プロデューサーは、とにかく優しい。気を抜いたら、
彼の優しさに甘えて甘えきつて、依存してしまいそう。
それはいけないこと。一方的に愛を与えてもらうだけ
では、相手を不幸にすると、凜世は思っていた。

「大好き……で、ごさいます！ あなた様を愛して、
おります！ お慕い申し……あげます！ あっあっあっ
あっあっあっはっあっああんっ！ ああんっ！ 気持
ちいいい！」

言葉じゃ、足りない。何を言つても、不足する。快
感の喘ぎも邪魔をして、思いを上手く伝えきれない。
もどかしさに、涙がこぼれる。

背中がぞくぞくと震える。脳内に、快樂物質が分泌
されていく。

性欲に溺れた、一人の雌。

アイドルであることを忘れて、色恋に落ちた悪い子。

汗だくになつて、男と交わつて磨かれていく、紛い
物のアイドル。

「もっと！ もっとお！ もっと、してください！
もっと、あうっ！ 私の中に、ずんずん、強く、叩き
付けて！ 奥の方まで、どろどろのつぐちよぐちよに
して！ はうっ！ ああんっ！ あんっ！ ああん！
はあんっ！」

足が、がくがくと震える。

日々、ダンスレッスンで鍛えられた足腰だけど、こ

のままでは耐えきれない。つま先立ちで、突っ張るようにして、ひたすら強烈な突き込みを受け入れる……。

一言で言えば、小ぶり。凜世の、白く、丸みを帯びた、慎ましやかなサイズのお尻が、ぶるんぶるんと、小刻みにたゆんでいる。お尻を激しく叩かれているかのよう。

「プロデューサーさまあつ！ あう！ あぐ！ くううつ！ い、きます！ 私は、はしたなく、いつちやいます！ ああんつ！ も、もう、だめ……！ い、く……ああ、ああ、は、あ、ん、あ、あ、あ、はあああんつ！」
こうして凜世は、性的絶頂を迎えさせられた。一瞬、視界が真っ白になり、意識が飛んだ。

「あ……。出て……ます」

口内に出された以上の精液が、膣内奥深くに射精されていく。

どぶり、どぶり、生命の伊吹を感じる熱い白濁液が。

「はああ、はああ……。いっぱい、出てます。たっぷり、愛して、いただきました。プロデューサー……さまあ……」

気持ち良かった？

そう聞かれた凜世は、しっかりと頷いた。

「はい！ とても……」

凜世は木にしがみついたまま、ずるずると、力なく崩れ落ちていく。あくまでも、着衣のまま。

胸に触れられて、少々ずれたけれど、そんなことは、大した問題じゃない。

挿入されていたものが抜けた、凜世の、丸出しにされたお尻。その下の方からは、白濁液がとろとろと、こぼれ落ちていった。

「まるで。お漏らしをしているみたいで、ごさいます」

凜世は悪乗りをしたように、片足を高く上げてみせた。

割れ目はまだ、ぱっくりと開いていた。

凜世ちゃんは、ご飯をちゃんと食べていますか？

お手紙や葉書に加えて電子メール。リスナーから寄せられた質問の一つに、そんなものがあつた。

凜世がとても小柄で細いことについての質問。この前など、イベントで夏葉に軽々と持ち上げられてしまったことについて、ちよつと心配したような内容だつた。

「はい。ちゃんと食べておりますよ」

今日も、ソロのお仕事。ラジオ番組に出演中。

「この間も、メガ牛エモ盛りをいただきました。大変美味しかったです」

共演している女性のパーソナリティから、突っこみが入る。

メガ牛エモ盛り!? それだけ食べられるのに、どう

してそんなに細いの? と。

「食べられるのでは、ありますが。普段は少し食べた
ら、それで、満足してしまうのです」

凜世はどうやら、そんな体質の模様。

羨ましい! そんな返事。それと共に……。

もしかして、余計な食欲が、どこかに飛んでいつちやつ
てるんじゃない?

共演者からの、冗談めかした回答に、凜世は首を傾
げていた。

「そういえば。この前同じユニットの、智代子さんが
『溢れる食欲が、どうにもならないの! 何もかもが
おいしいの!』と、大いに嘖いておりました」

……ああ、それだねと。共演者が頷いた。吹き飛ん

だ食欲が、近くにいる智代子に乗り移ったのだろうか。

智代子は、カロリーの過剰摂取が原因として。放課後クライマックスガールズの鬼教官こと、夏葉によって度々、強制ダイエットトレーニングを受けさせられているような。

それは、ファンも事務所の面々も認めている、周知の事実。もはや、隠しようもない。

「そのようなこと……。大変申し訳なく、思います」

そして凜世は考えて、答えを出した。

「お詫びとして。今度。夏葉さんが考案された、智代子さんのダイエットトレーニングに、私も、付き合わせていただくかと、思います」

「が、頑張つてね！ 主に、智代子ちゃん。絶対ハードなトレーニングだそれはと、誰もが思った。

どひー！ いやあああ！ 無理ー！ー！ そんな、智代子の声が聞こえてきそう。

リスナーもスタッフも、心の中で、智代子にエールを送ったものだ。が、頑張れ！ と。

ガラスの向こう側に、くすくす笑っているプロデューサーの姿が見える。

愛しい人の姿に、凜世は軽く微笑んだ。

今日もまた、プロデューサーの車で、送り迎えをしてもらえる日なのだ。

ああ、帰りが待ち遠しい。

今日は着物ではなくて、私服。

この、ロングのスカートを、両手で荒々しく、大胆

にまくっていただいで……。

「……駅弁」

ふと、思い浮かんだイメージ。

え？ 共演者が、聞き返す。

「なぜでしょう。突然ですが、おいしい駅弁を、食べたい気持ちになりました」

ああ、駅弁いいよね。おいしいよね。釜飯とかいいな。私も食べたいいなー。

共演者が頷き、話題が変わっていく。

(プロデューサーさまに……していただききたいです)

丁度、収録も終わりの時間だ。

締めめの挨拶と共に、凜世が歌う曲が流れ始める。

(服を、着たまま)

唇が、乾いている。

ここは、人工物で囲まれた建物の中。

(駅弁スタイルで)

凜世はポケットから、リップクリームを取り出して、軽く塗った。

(私の体を……軽々と、持ち上げていただいて。ずんずんずつぷずつぷと、荒々しく、おもちゃを扱うかのように、突き上げていただいで……)

その様を、思い浮かべる。

ごくりと、唾を飲む。

（私は、快楽に耐えきれず……発情した獣のように、喘ぐのです）

凜世、お疲れ様。今日も良かったぞ。

愛しい人がそう言つて、労をねぎらつてくれる。

凜世は、ありがとうございますと、心から礼を言つた。

ああ、私はもう、待ちきれません。

早く……。早く私に、ご褒美をください。

体が、疼く。

体温が高まり、吐息が熱くなっていく。

「プロデューサーさま」

「うん。帰ろうか」

荷物をまとめて、スタッフの方々に、丁寧に挨拶。

ラジオ局の建物を出て、駐車場に停めてある車に乗つて、深いため息をつく。

ようやくのことで、緊張から、解放された気持ちになれたから。

凜世。もう少しの我慢だぞ。

プロデューサーが、そう言った。

俺も、この日を楽しみにしていたんだ。

同じような思いを、してくれる。凜世は嬉しくなつた。

「プロデューサーさま。凜世はもう、準備オツケーで
ございます」

ぐちゆりと、濡れているのがわかる。想像だけで、
その有様。

「すぐにでも、ねじ込んでいただきとう……ございま
す」

俺もだと、プロデューサーは言った。そして……。

目的の場所に辿りつくまでの間、声で、楽しませて
くれないかと、リクエスト。

「かしこまりました」

万が一でも、見られてしまったら大変なことになる
から、事はあくまでも慎重に。

凜世は、長いスカートに腕を潜り込ませて、ゆっく

りと、指先を当て始める。

「ん、ん……」

熱い時は、すぐに訪れる。

「は……。ふ……。ん。プロデューサー、さまあ」

愛しの彼に抱かれる姿を想像しながら、密かな自慰
にふける。

凜世のか細い声が、車中に響く。

二人だけしか知らない、禁断の時間が続く。

もう少し。あと少し。待ちきれない。

つぶ、つぶ、と、割れ目をほぐしていく。

愛液が、指先を濡らす。

指では、満足出来ない。

私の割れ目は、あなた様のものを……欲しておりません。

早く、早く。

「は、はあ。ふうう」

凜世の切なげな吐息も、とろけるような声も、プロデューサーには、甘露のように感じた。

早く、この子としたい。

けれど、でも……安全運転！今はあくまでも、運転に集中！

プロデューサーは、凄まじい煩悩を無理やりに振り払って、目的の場所へと向かうのだった。